

カラス

野元正

カラスを嫌う人が多い。
川の土手の上を黒い葬列が進む。風に幟を
靡かせた葬列は影絵のように動いていく。葉
をすっかり落とした櫟の枝で一羽のカラスが
それを見送っている。こんな情景が映画やT
Vで繰り返し返し放映され、カラスの不気味さが
人の心に刷り込まれる。そしていつの間にか
私のなかにもカラスは黒い不吉な鳥というイ
メージが出来上がっていた。

カラスは蘇鉄の朱い実が好きだ。サツキツ
ツジが咲く頃、私が出た神戸市立相楽園の蘇
鉄園には百羽を超えるカラスが集まってくる。
彼らは、園内にある樹齢四百年以上といわれ
る旧花隈城の鬼門を守る大楠を足場に群がり、
二、三日実の朱い皮の部分だけを食べる。も
しかしたら、食べるというより集めているの
かもしれない。というのは、カラスはゴルフ

場でピンクや赤などカラーボールをコースから盗んで巢にため込む習性があるからだ。どうも派手な色が好きらしい。ところでは朱い皮は食べるが、白い殻の中の実は決して食べない。サイカシという毒を含んでいるのを知っているからだろう。奄美大島などでは救荒植物として飢饉のとき、水で晒して食べたが、ときどき死者が出たという。しかしカラスが蘇鉄の実を食べて死んだという例は聞かない。朱い皮だけを巧みに食べ、あとは上空から爆弾を投下するように白い実を土の上に落とす。運がよければ、発芽する。蘇鉄にとって子孫繁栄のためにはありがたい話だ。大楠に集まったカラスは本当にかしましい。私は大楠の下でカラスの鳴き声を真似てみた。初めは無視されたが、しばらくすると、しきりに辺りを窺うようになった。二日目もカラスは蘇鉄の実を求めて、数も増えたように思う。賑々しく騒ぎまくって大

楠と蘇鉄の間を歩き来している。少し恥ずかしい気もしたが、入園者がいないときを見計らって、もつと真剣に鳴き声を真似てみた。と、それまでの騒ぎが急におさまり静かになった。私を仲間と認めてくれたのだろうか。

相楽園の瓢箪型の池には緋鯉、真鯉がたくさん泳いでいる。柳鼠色の池面に緋鯉は映える。しかし、緋鯉はときどき補充しなければならぬ。というのは、サギが三十センチメートル以下の緋鯉が大好きなのだ。真鯉は黒いので見えないのか襲わない。池の主のよう。な。大きい緋鯉は腹の内臓だけを突いて食べ、園内に残骸を放置する。そして油断していると、いつの間にか池の鯉は黒い真鯉だけになってしまう。入園者から緋鯉はどうした？と問い合わせが来る。サギを捕獲して殺すわけにもいかななし、池が大きいので、テグスを張って防御することもできない。仕方がないので、サギを見つ

次第、入園者のいないときは、園内の小石を当たらないように投げて追い払う。しかし、すぐ慣れてしまつて逃げなくなる。憎たらしいくらい堂どろとしている。

ある日、見覚えのあるカラスが単騎、サギを池から追い払い始めた。池畔に佇んで緋鯉をねらうサギに急降下攻撃をかける。急上昇するサギを同じ曲線を描いて追尾する。そしてそのカラスはいつもの鳴き声で仲間を呼んだ。二、三羽のカラスがどこからともなく現れ、サギの前方を遮った。もちろん私にも出動を要請していたと思うが、翼をもたない哀しさを噛みしめながら空中戦をただ見詰めるばかりであった。

先日、TVで仲間の救助要請の声に応えて、ヒッチコックの『鳥』のように空を覆い尽くすカラスの群れの映像を見た。それに比べて人間社会の冷たさが身にしみる。人の世界では見て見ぬふりが横行している。